

アフガニスタン

ふか まち ひろ き
深 町 宏 樹

アフガニスタンに関する邦文の研究文献はきわめて乏しい。太平洋戦争終結以前には軍事目的のための若干の調査研究があり、戦後も考古学、言語面での調査がないわけではない。しかし、日本でアフガニスタンそのものに関する学術・準学術論文が発表され始めたのは最近のことである。

アフガニスタンの知識人層による1960年代からの反王制民主化闘争は78年4月革命を結果した。この革命の分析を試みたものとして深町宏樹・清水学〔14〕がある。その後、1979年12月のアフガニスタンにたいするソ連の軍事介入を契機に、突然日本でもアフガニスタンが論じられるようになり、10数冊の単行本と数々の雑誌論文が発表された。しかし、そのほとんどは冷静な学術的論述とは言えない。そのなかで佐々木徹〔6〕は、現地滞在4年間の経験にもとづいてアフガン人社会を描いた好著である。同書自体は決して学術的ではないが、4月革命の社会的背景を知るには必読の書である。堀込静香〔15〕は貴重な労作である。

〔文献リスト〕

- 〔1〕 今川瑛一・清水学「1981年のアフガニスタン——定着せぬカルマル政権の支配——」(『アジア・中東動向年報 1982』 アジア経済研究所)。
- 〔2〕 今川瑛一・清水学・長田満江「1980年のアフガニスタン——出口なきアフガン内戦——」(『アジア動向年報 1981』 アジア経済研究所)。
- 〔3〕 遠藤義雄「アフガニスタン・1979年2月からソ連軍侵攻まで」(『海外事情』 第28巻第4号 1980年4月)。
- 〔4〕 遠藤義雄「ゴルバチョフ政権とアフガニスタン」(『海外事情』 第33巻第10号 1985年10月)。
- 〔5〕 小林三衛「アフガニスタン革命と土地改革法」(『法社会学』第34号 1982年)。
- 〔6〕 佐々木徹『アフガンの四季』(新書判)中央公論社 1981年。
- 〔7〕 高橋博史「1978年アフガニスタン・クーデターと革命グループ」(『海外事情』 第31巻第2・3号 1983年2・3月)。
- 〔8〕 西修「アフガニスタン共和国憲法」(『駒沢大学法学部紀要』 第36号 1978年)。
- 〔9〕 深町宏樹「アフガニスタン——伝統社会改革の試み——」(『世界』第415号 1980年6月)。
- 〔10〕 深町宏樹「1982年のアフガニスタン——混乱の継続と政治的解決への動き——」(『アジア・中東動向年報 1983』 アジア経済研究所)。
- 〔11〕 深町宏樹「1983年のアフガニスタン——険しい政治的解決への道——」(『アジア・中東動向年報 1984』 アジア経済研究所)。
- 〔12〕 深町宏樹「1984年のアフガニスタン——地方自治権の容認とソ連軍の戦術転換——」(『アジア・中東動向年報 1985』 アジア経済研究所)。
- 〔13〕 深町宏樹「1985年のアフガニスタン——支配権確立の試み——」(『アジア・中東動向年報 1986』 アジア経済研究所)。
- 〔14〕 深町宏樹・清水学「アフガニスタン78年4月政変——その歴史的背景——」(『アジア経済』第19巻第10号 1978年10月)。
- 〔15〕 堀込静香編『アフガニスタン文献目録稿』日本・アフガニスタン協会 1980年。
(アジア経済研究所動向分析部研究主任)